

名城大学 経済・経営学会会報

No.38

『名城論叢』
第十巻 第二号 付録
二〇〇九年九月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

『1Q84』読みました……大崎孝徳 1
ロンドンでバスに乗ろう！
……山本雄吾 6

『1Q84』読みました

経営学部経営学科 大崎 孝徳

今、話題の村上春樹(著)『1Q84』。

先週から読み始め、昨日(平成二二年八月七日)、読み終えた。奥付に印刷された発行日は五月三〇日となっているので、入手から二カ月以上も経ってしまっている。

ちくさ正文館の小野さんに発売前から、注文していたため、世間でもかなり早めの入手になったと思われるが(都心の大型書店では五月二七日より先行発売が開始されていた)、前期はなにかと悲しいことが多く、全く手をつけられなかった。

そういうする間に、いわゆる『1Q84』批評本が出回り始め、「まずい」、このままではテレビなどでも、ネタばれトークが氾濫し、自ら読む前に結論を知ってしまうという事態に追い込まれるかもしれない(何のために二冊併せて三、七八〇円も

払ったんだ!)という恐怖心より、遅ればせながら慌てて手に取った次第である。

ちなみに、『1Q84』批評本として、『村上春樹『1Q84』をどう読むか』(河出書房新社)や『村上春樹の『1Q84』を読み解く』(データ・ハウス)などがあるが、断然、前者の河出書房新社をお薦めする。二つとも手にせず、発言するのはもちろん正しくはないが、ホームページを見る限り、データ・ハウスの方は、そもそも編著・村上春樹研究会の時点で怪しく、しかもキャッチコピー…なぜこれほど面白いのか? となっており、批評としての基本的立ち位置を誤っているとしか言いようがない。みんな村上春樹を無条件に崇拝し、そこから何が生まれるのだろうか? 一方、河出書房新社の方は、評論家や作家など三五名の論考からなり、キャッチコピー…二〇〇九年のベストセラー、村上春樹『1Q84』の賛否を問うとなっており、王道を行く批評本と言えよう。早速に入手したい。

もちろん、正しくはないのだろうが、実際の小説を読むより、それに対する批評を読む方が私は常に楽しい。とりわけ、評論家ではなく、同業者である作家の批評の方が、断然、おもしろ

い。評論家の批評は小説本体から離れ、自分の都合のいいように無理やり型にはめているように感じることが多い。悲しいかな、自分の論文を読んでいるようだ（というところで、まあ反省の材料としては有効に機能しているともいえるが）。

ともかく、自分の読み方といわゆるプロの読み方との比較が実に興味深く、ものを考える力や視点など、少しは向上するよくな気がする（もつとも自分の投稿論文に対するコメントに関しては、楽しむというスタンスで受け入れることができない場合もあるものの）。

改めて考えると、新品のハードカバーの小説を購入したのは、四一年の人生において初体験だと思ふ。こういう仕事をしていて、大変恐縮だが、私は本が苦手だ（本嫌いではありません。本嫌いという言葉には、何か自らの意思で積極的に読まないというニュアンスが含まれているように感じるが、私は読みたくて仕様がないうもの、本を手持てない、頁がめくれないのであります）。

よって、本に愛情がわくはずもなく、ブックオフで一〇〇円の棚にある本を主たる購入対象としている（研究分野除く）。そんな私がブックオフで一〇〇円はおろか三分の二くらいは価格になるのも待てない！できれば他人の手垢にまみれていない状態で読みたい！と一念発起し、購入したのが『IQ84』というわけだ（実際、二カ月も寝かせてしまったが）。

おそらく人生で初めて小説を読んだのは、当時、かなり話題

になった芥川賞における若き女性のダブル受賞の時だ。一九歳と二〇歳という人間が、よくわからないが難しいであろう小説というものにおいて、高く評価を得た作品とはいかなるものか？ということが気になり、『文藝春秋』を手にした。実は芥川賞は新人賞に該当するというのを当時は全く知らず、最も権威のある賞だと勝手に思い込んでいた（権威に弱い自分が悲しい）。すると、そこには審査員である石原慎太郎や村上龍などの講評が掲載されていた。なぜだか、小説本体以上に、これらの講評が非常に気になった。当然のことながら、講評を読むには小説本体を読む必要があり、話の順序が逆だが、一言でいえば、講評を読むために小説を読んだ次第である。

という不自然な動機で『蹴りたい背中』と『蛇にピアス』を読んだわけだが、感想はズバリなし、何も感じなかった。読み終えるまで苦痛で仕方がなかった（今から考えれば、恋する女子高生や舌先に切れ目を入れようとする若い女性といった主人公に強く共感できないというのは当たり前の話かもしれない）。

一方、講評に関しては、まさに鹵に衣を着せぬ痛烈な批判が実直に述べられており、小説世界の厳しき、真剣さを当時、痛感させられた記憶が残っている。

ネットで調べてみると、彼女たちが芥川賞を受賞したのは平成十六年とのこと、なんと三六歳という、かなり遅れた、そして小説の面白さを全く感じることができない、何とも怪しい小説デビューだった。

小説の面白さを発見できなかった私は、その後、当然のことながら、小説を手にすることはなかった。しかし、ある日、本当にたまたま時間がぼっかり空いてしまった。そして、なぜだか？ 誰でも知っている『ノルウェイの森』の村上春樹が頭に浮かんだ。変なところが律儀な私は『ノルウェイの森』ではなく、デビュー作である『風の歌を聴け』を手にとった。それほど長いものではなく、何とか読破することができた。が、感想は「わからない」の一言だった。まだ時間があつたため、二作目『一九七三年のピンボール』を手にする。またまた、わからない。しかし、まだ時間があつた。半ばやけくそで、三作目『羊をめぐる冒険』を手にする。奇妙な話で自分がどれほど理解できているかわからない。が、とにかく、初めて話の先が気になるという感覚を得る。それにつられて、知らず知らず、読み進めるといふ体験をした。いわゆる読書というものが初めてできた瞬間だと思う。

その後、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で完全にはまってしまい、またエッセイを読み、作品にとどまらず、人間としての村上春樹ファンになってしまった。彼の謙虚に日々コツコツと挑戦していく姿勢に強い感銘を覚えたのだ。

『1Q84』の話をしよう（これから読まれる方のためにネタバレは避けながら）。

まず、ノーベル賞受賞近しと騒がれる中で、自分の作品を発表する気分はどのようなものなのか？ せいこい私なら、この大

事な時期に下手を打つとまずい、賞をもらえるまで無難に翻訳でもやりながら、しばらくはお茶を濁そうとするかもしれない。とにかく、非常に重要な時期に出版されたことになる（おそらく本人にそうした意識はないだろうが）。

村上春樹は単なる人気作家ではなく、世界中の数多くの権威ある文学賞を受賞しており、もちろんものすごい大文豪なのだろう。作品の中には大いなる文学的価値のようなものがあるのだろうが、もちろん私にはそうしたことは何もわからない。

私は単に彼のユーモアが大好きだ。よく主人公が冗談を言い、それを相手の女性にすかされるシーンが登場するが、そこが面白くて仕方がないのだ。また、よくはわからないが、ちょっとはわかるような気もする、曖昧なストーリーも実に気になる。あと、これも漠然としているが、読後感がたまらなくいい。いわゆる胸がキュンという感じにたびたび陥る。

以下、『1Q84』の超個人的な感想を述べさせていた
だくと……

まず、三人称で語られている点は個人的に非常に残念だ。三人称では村上春樹のユーモアが表現しにくいように私には思える。以前、彼のエッセイで、「最初は一人称でしか書けなかったが、やっと三人称でも書けるようになった」とのコメントがあり、そういう意味ではレベルの高いものなのかもしれないが、個人的には好みではない。村上春樹作品に限らず、三人称だと非常につくりもの臭く感じてしまい、往々にして読み進む気が

失せてしまう。

話の筋は非常にわかりやすい展開になっている印象を受ける。年齢の影響なのか、それともマス・マーケットを狙っているのか、その要因はわからない。ただ、おそらく作家にもいろいろなタイプがいて、純粹に自分の書きたいことを書く作家もいれば、読者や市場を意識する作家もいるだろう。村上春樹は市場を強く意識している作家だと思う。それは、もちろん読者を大事にするという意味もあるが、実際の本のセールスもかなり気にかけていると想像している。それはいわゆるお金に執着しているというイヤらしい意味ではなく、もともと彼はジャズ喫茶の経営者であったし、工場見学に基づく作品（『日出する国の工場』）もあり、純粹にビジネスというものが好きなのではないかと感じる人が多い。

あと、読後感。これは残念ながら、よくなかった。下巻の真ん中あたりで完全にさめてしまい、どういうラストでも、まあいいやという感じになってしまった（そういえば、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は良かったなと思いがら……）。

しかしながら、そこまでは面白く、どんどん先に読み進みたい感覚に久しぶりに陥ったのはうれしかった（私の場合、二〇冊に一冊もそういう感じにならない）。先に進みたいと思うということは、たぶん、その世界にどっぷり浸からされているからだろう。まさに作者の意図に見事にはまってしまっているの

だ。

例えば、『海辺のカフカ』では、魚が空から降ってきたり、猫としゃべれるおじさんが登場するが、そのたびに大いに驚いている自分がいる。そんな絵空事、起り得るはずもないのに、本当にビックリしているということは、やはり完全に物語に入り込んでいるからであろう。よく彼は、とんでもない話題を書く際は、詳細に記述しないといけないと指摘しているが、それが見事に成功している。

ただ、私にとっては作家の影があまりに強いため、作品を純粹に鑑賞することが邪魔されているという気もする。例えば、並行するストーリー展開は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、空気をなぎは『海辺のカフカ』の石、何かに取りつかれているという状況は『羊をめぐる冒険』、宗教関係の話はオウム関連取材をまとめた『アンダーグラウンド』の影響を受けているのか？ など、純粹に物語に入り込めないシーンが度々、見受けられた。

何かの書評で、『1Q84』は村上春樹のこれまでの総決算という記述を目にしたが、そんなことはもっともっと先延ばしにして、どんどん冒険・挑戦していただきたいと、一ファンとして、強く思い、切望する次第である。

その背中を見て、励みにし、自らも頑張っていきたい。

（以上、読書歴五年という超初心者身分でありながら、書評っぽいことを書かせていただいた。もちろん、大読書家の方

や私なんぞ足元に及ばない大ハルキストの方など、巷にウヨウヨしていると思います。文句があれば、いつでもおっしゃってください。すぐに、「ごめんなさい」と謝ります)